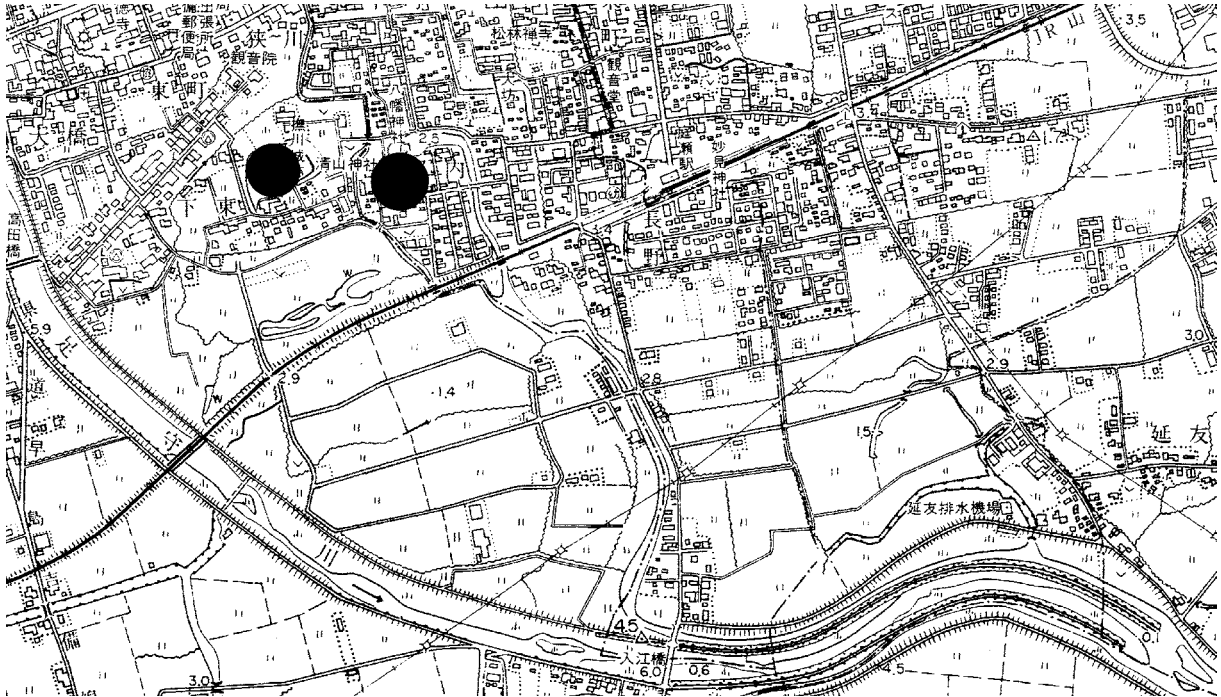


撫川城とその周辺

河田健司

【遺跡の位置】



【遺跡の概要】

撫川城・庭瀬城の周辺

撫川城・庭瀬城の位置する岡山市北区撫川地区及び庭瀬地区は、現在法万寺川によって大字が分けられています。

庭瀬、撫川の地名は古代にさかのぼり、備中国都宇郡には撫川郷、備中国賀夜郡には庭瀬郷の名がそれぞれ見られます。両郷は、「庭瀬川」を郷境としており、またこの郷境は都宇郡と賀夜郡の郡境でもありました。古代より続く撫川・庭瀬の地名を冠する両郷の領域は、撫川郷は足守川西岸の岡山市箕島、早島町付近まで広がり、また庭瀬郷の領域も岡山市北区川入や吉備津付近まで含むと考えられています。

撫川郷、庭瀬郷の郷域とされる一帯は、吉備の中山が位置する山塊の南麓に広がる平野上に当たり、かつて現在の児島湾が「吉備の穴海」とよばれ深く内陸部に進入していた頃には、現在よりもかなり北側に海岸線があり、そこに注ぎ込む足守川は、多くの支流に分かれヤツデ状に平野の中を流れていたと考えられます。

この足守川の沖積作用により、吉備中山南麓の平野は徐々に南へ拡大していき、室町時代には海岸線は現在の撫川城跡・庭瀬城跡の南側付近にまで下がっていたと考えられます。しかしそれでも、慶長（1596～1615）から正保（1645～1648）頃は、満潮時には現在の中撫川

付近には 200 石積み程度の船は入ることができたようです。

撫川城・庭瀬城跡

撫川城跡は東西約 85m、南北約 55m の長方形の城跡です。西と北、南側の一部には野面積みの石垣が残されており、南に大手門の痕跡があります。周囲には幅約 15m 堀が巡が巡り、現在岡山県指定史跡となっています。

庭瀬城跡は撫川城跡の東に位置し、現在は住宅地となっています。かつては庭瀬藩邸の北にまつられていた清山神社と、住宅地の中の堀割がかつての面影を残しています。

現在は「撫川城跡」と「庭瀬城跡」の二つに分かれています。元来この城は「庭瀬城」と呼ばれ、毛利方の「境目七城」の一つとして「中国兵乱記」に名が記されています。この庭瀬城の築城時期は、寛治年間(1087～1094)、永禄年間(1558～1570)などの説がありますが。天正年間(1573～1592)には「中国兵乱記」の記述から確実に築城されており、現在の岡山県指史跡撫川城跡はその一角を占めていたと考えられます。この地域は都宇郡と賀夜郡の境に位置し、港もあるため、戦略上重要な城でした。当時周辺には沼地が広がっていたと考えられ、強固な平城でもあったようです。天正十年(1582)の高松城水攻めの際、織田方に攻められて落城し、宇喜多方の城となりました。

江戸時代の慶長七年(1602)庭瀬藩主となった戸川達安は現在の「撫川城跡」の東に新たに陣屋を構えました。陣屋は「庭瀬城」の一部を再利用して整備され、現在の「撫川城跡」も含まれる程度利用されていたようです。撫川城跡の南西にある「太鼓橋」は、戸川氏の陣屋の大手門跡といわれています。戸川氏は陣屋町の整備を行い、17世紀後半には庭瀬の町並みはほぼできあがっていたようです。

戸川氏は延宝七年(1679)、四代目戸川安風の時に跡継ぎがなく改易となりますが、撫川郷内に撫川知行所(1000石)を構えていた安風の弟達富が、5000石の旗本として名跡を継ぎます。このとき堀を境に「庭瀬城」は二分され、西側(現在の撫川城跡周辺)は達富の支配下に、東側(現在の庭瀬城跡)は廃城となりました。戸川家改易の後、庭瀬藩領はしばらく天領になりますが、その後新たに庭瀬藩主となった久世重之、松平信道、板倉重孝は廃城になったところに再び庭瀬藩陣屋を構えます。現在「庭瀬城」「撫川城」と別々に呼ばれるようになったのは、延宝七年に「庭瀬城」を東西に二分したことがきっかけであると考えられます。

【文献】

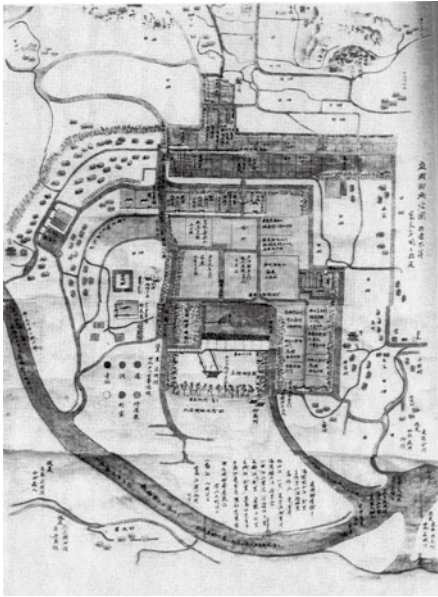
岡山県史編纂委員会 1984年『岡山県史第六巻 近世Ⅰ』岡山県

岡山大学文学部内地域研究会 1973『吉備町誌』吉備町史編纂委員会

1980『日本城郭体系13 広島・岡山』新人物往来社

【交通】

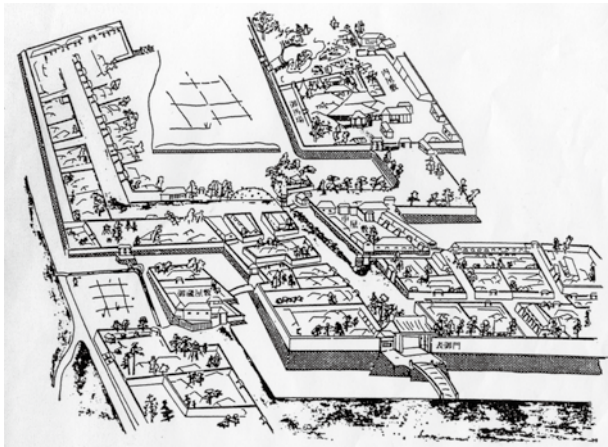
JR山陽本線「庭瀬」駅下車 徒歩10分



庭瀬陣屋絵図 (1661 ~ 1671 頃)
(吉備公民館蔵)



庭瀬城範囲 (17 世紀後半)



庭瀬城全景 (1857)
(岡山県立博物館「古絵図写」から複製)



庭瀬城範囲 (19 世紀)



推定撫川城範囲